

京都市廃棄物減量等推進審議会
第1回新京都市循環型社会推進基本計画策定に係る専門部会
摘録

【日時】平成20年8月26日（火） 午後2時～午後4時20分

【場所】職員会館かもがわ 大会議室

【出席委員】酒井部会長，浅利委員，石田（捨）委員，石田（哲）委員，石野委員
岡委員，岡田委員，北原委員，佐伯委員，中村委員，林委員，宮川委員
山内委員，山田委員

【欠席委員】池北委員，田村委員，山川委員

I 開会

1 事務局より専門部会の位置づけの説明

京都市廃棄物減量等推進審議会は、条例の中で一般廃棄物の減量に関する事項について、市長の諮問に応じ調査・審議するための機関である。この中で、特別の事項について調査・審議する必要のある場合は専門部会を設置するとされている。

今回、審議会の高月会長との相談の下、特別な調査・審議の必要があると判断し、本専門部会を設けさせていただいた。

2 委員自己紹介

（浅利委員）

京のごみ戦略21の策定に学生委員として参加し、市民参加の必要性を訴え、市役所前でごみ祭りという企画を実施させていただいた。次の計画に向けてどういうことができるか一緒に考えたい。

（石田（捨）委員）

本職は産業廃棄物であるが、現在は一般廃棄物の今後の動向を含めた勉強している。最近、会社で廃棄物のリサイクル研究に力を入れている。

（石田（哲）委員）

この問題には非常に関心が高い。

過去の委員の方々の意見を踏まえてよりよきものにしたい。

（石野委員）

今まで審議会の一員として参加してきた。多くの専門家の中で、一主婦として、原点に立った視点で参加したい。

(岡委員)

KYO-SENSE プロジェクトと銘打ち、ごみの削減から打ち水から色々なプロジェクトを行っている。

若い視点から意見を出したい。

(岡田委員)

企業の立場から、どういったことができるかを考えたい。

(北原委員)

観光客が多いのは京都市の特徴である。観光客はお客様であるのと同時に、多くのごみも運んできている。この観光客によるごみ問題について協力したい。

(山田委員)

老人福祉施設は京都市内に80施設ある。今後、地域密着型で小学校区、中学校区に設営していくほか、ホームヘルパーやデイサービス、高齢者専用住宅等への取り組みを行っている。

高齢者の生活の変化による廃棄物への影響という部分でお役に立てるのではないかと思う。いろいろと勉強していきたい。

(山内委員)

市民によるごみの発生抑制の啓発を主として行っている。

(宮川委員)

立場上、事業系の一般廃棄物を排出している。

食品残渣等のリサイクルに取り組んでいきたい。

(林委員)

市町村の一般廃棄物処理計画づくりに携わるのは初めてなので、色々と勉強しながら、京都市らしいものとはどういうものかを考えていきたい。

(中村委員)

ごみをいかに減らすか、ごみをどう扱っていくかに挑戦してきた。ブログを見ていただければこれまで色々行ってきたことがわかってもらえると思う。

これまでの経験を生かして少しでも役に立ちたい。

(佐伯委員)

地域女性会では、廃食油の回収や有料指定袋制度の導入時に、地域と一緒に取り組んできた。

現在はマイバッグの推進を行っている。

色々と勉強させていただきたい。

(酒井委員)

京都の政策は全国的に注目を浴びる宿命にあり、温暖化対策との統合政策という意味でも非常に重要なものである。精一杯の知恵を絞りたいと思っている。

事務局より欠席委員の紹介

池北委員，田村委員，山川委員

事務局の紹介

前田部長，松本部長，瀬川課長，田中係長

酒井部会長挨拶

今回の循環型社会推進基本計画はごみ処理基本計画を内包した計画として位置づけると聞いている。すなわち、循環型社会をつくる上での基本路線を示す計画であると同時に、その中でごみ処理を着実に遂行していくための計画である。日々の暮らしと密接な関係にあるごみ処理とともに、資源エネルギーを見据えた循環型社会のあり方を、京都市としてどうデザインするか考えていくべきだと考えている。

審議会からは半年ほどで成案を出すよう指示を受けているので、皆様方の闊達な意見をよろしく願いたい。

事務局挨拶

本年度より門川新市長の下、重点施策のひとつとして、“地球にやさしい環境共生のまちづくり”を挙げている。

市長は、共汗と融合という2つのキーワードを掲げている。共汗とは市民と行政の切り離しをせず、共に汗をしようということであり、融合とは、従来の縦割りをやめ、協力して実践していこうということである。以上の2つの理念の下、事務局としても本会議に参加していきたい。

今回の基本計画で求められているものは、京のごみ戦略21をさらに発展させ、より上流対策で地球環境を見据えた取組である。基本計画には京都の特性を生かした部分が必要と考えられる。京都の特性とは、学問レベルが高い、有数のモノづくりの都市、観光都市、流通が盛ん、大都市である、高齢化率が高い、学生が多い、ボランティア活動が活発である等が挙げられる。

本部会の委員は、京都市の特性である分野を代表している方々であると思う。皆様の知恵をお借りして融合し、10年、15年先も確信を持って進めていける計画を策定したいと考えている。

本日配布資料の確認

資料 1「京のごみ戦略 21」の進捗状況等について、資料 2 今後のスケジュール（案）、資料 3 諮問書（写し）、資料 4「京のごみ戦略 21」の進捗状況（現状把握と課題整理）について（第 42 回京都市廃棄物減量等推進審議会資料）の 4 点と参考資料として、「京のごみ戦略 21 年次報告書 ～平成 19 年度版～」、「事業系ごみの減量施策のあり方について」（答申）、「環境モデル都市提案書（京都市）」、「第 2 次循環型社会形成推進基本計画の概要について」の 4 点と審議会本会委員ではない方には「京都市循環型社会推進基本計画 京のごみ戦略 21」をお渡ししている。

Ⅱ 諮問内容について

（酒井部会長）

7 月 18 日に、市長より審議会高月会長へ諮問された内容について説明してください。

事務局より資料 27 頁を基に諮問内容の説明

（酒井部会長）

先の前田部長のごあいさつは諮問内容の+αを本部会に求められており、1 歩踏み出して考えていきたいという意見表明をされたと理解している。

施策の正しさの判断は後世に委ねることとなるが、少なくともベクトルとしての正しさは示していかなければならない。また、本部会にも様々な利害関係者を集っていただいているため、少なくとも委員の合意した内容に到達しなければならない。これが半年間のミッションとなる。

Ⅲ 議事

1 京都市における廃棄物行政を取り巻く現状、課題について

（1）「京のごみ戦略 21」の進捗状況（数値目標、具体的な施策の実施状況）について
事務局より資料に基づき説明

（酒井部会長）

説明に関するご質問はありますか？

（石田（哲）委員）

部会の進め方について要望したい。

委員の構成メンバーには、個人と業界の代表がいて、立場の違いがあるため、出身団体の意向を反映できるような十分な時間をいただきたい。団体に不利益になるような事項の場合は、団体を納得させることも必要になってくる。

この部会だけでなく、他の審議会との情報の共有も必要である。例えば京都市では「環境

にやさしいライフスタイルを考える市民会議」というものが開催されているが、ごみ処理は市民生活と密接な関係にあるので、こういった他の審議会の情報も取り入れながら議論していく必要があるだろう。

情報開示についてだが、机の上で資料を見ても、よくわからない部分が多い。焼却場などの現場へ行き、現場の情報、現場の人たちの意見を知りたい。

焼却場において、昔はプラスチックがあってよく燃えたが、分別後は重油を投入しなければよく燃えないという無駄が生じているという話を聞いたことがあるが、これが事実であるかどうか。また、指定有料袋の20億円の収入のうち、11億円が原価としても、残り8～9億円が有効な使い方になっているのか？このあたりを審議すべきではないか？

こういった議論をするに当たっては、不利なデータは出さないのではなく、大いに議論して京都市民、府民、日本国民に喜んでもらえる結論に導いていきたい。

(事務局)

現場視察については、要望があれば段取りする。

情報開示に関し、必要な情報は事務局で用意する。他の審議会との情報の共有について、関連する情報は取り揃えるが、出せる情報、出せない情報があるのはご理解頂きたい。

(石田(哲)委員)

行政において、部局が違えば情報が流れてこないことがある。委員の必要とする情報は、他局で出している情報も出して欲しい。

(事務局)

おっしゃるとおりである。市長の意向として、融合というキーワードの下、縦割りをやめるつもりである。今回の計画は環境局のみで完結するものではないのは当然であり、他局の情報についてもできる限り対応する。

出身団体の意見の集約という点についても、部会の資料は、未定稿であっても、事前に配布することを考える。

(酒井部会長)

事務局は、循環・ごみのスペシャリストであることを大前提として、その上で、様々な方面に目配りして欲しい。但し、事務局にも不十分な点がありうるという認識の下、委員それぞれの立場にて意見を出すというスタンスで本部会を進めていきたい。

団体代表の立場は当然理解すべきことであるし、団体にとって影響が大きい場合には、ヒアリングなどで対応するのは当然のことであるので、その配慮は考えていきたい。

(2)「京のごみ戦略21」の進捗状況(組成状況、ごみ処理原価)について

事務局より資料に基づき説明

(酒井部会長)

9 頁の地球温暖化防止指標の温室効果ガス削減率は、平成 18 年度が 0%で、平成 19 年度が 44%削減となっているが、これは何故か。突然こんな大きな変化が生じた経緯について説明して欲しい。

(事務局)

この数値は、ごみの組成と排出量から、プラスチックの焼却量を算定し、算出したものである。組成が年度によって大きく異なるため、このような結果となっている。サンプル数が多くあれば正確な値が出るだろう。

ここまで削減が大きいのは、プラ製容器包装分別回収の全市拡大によって、プラスチックの焼却量が削減した結果である。計算上はプラの分別回収によって温室効果ガスが 44%削減したこととなる。

(事務局)

クリーンセンターでの CO₂ 量の測り方は、物理的な CO₂ 総排出量ではなく、プラスチックのみの焼却分でカウントしている。紙や木等のバイオマス系のものについては、本来循環すべきものであるため(カーボンニュートラル)、カウントしていない。

このやり方に、説得性がどの程度あるのかという部分はあるが、化石燃料分は分別により削減したといえる。

(中村委員)

ごみの組成は今後の検討において極めて重要である。

プラスチックを分別すると、石油系はなくなり、生ごみや木くずなど、カロリーの低いものが残る。適正な運転ができなければ、焼却炉の寿命自体がおかしくなるため、適正なカロリーを維持しなければならない。こういった観点からも、ごみの組成は十分に調査が必要と思われる。

(事務局)

ごみ質の調査はしっかり行っており、燃やしているごみのごみ質、家庭系および事業系から出るプラスチックの割合も調査している。但し、ごみの組成はバラツキが大きく、平均的なごみをとっているかは難しいところがある。京都市では、クリーンセンター4 箇所、各 2 回の平均を出しているが、その値が正確かどうかは議論すべきところはあると思う。

毎年、プラスチックの割合は変動し、平成 19 年 10 月からの分別の全市拡大で、ごみの中のプラスチック量は減少している。但し、容器包装プラスチックは分別しているが、製品プラスチックはリサイクルルートが無く、焼却している。

本部会にて、どこまで分別を徹底するかについても議論して欲しい。

(酒井部会長)

ごみのデータ把握は難しいが、その中で京都市は最大限の努力をされているものと思われる。

ごみ組成については引き続き、しっかり調査して欲しい。

プラスチックの扱いについては今後の検討課題とする。

要望として、資料では、重量比だけを示し、容積比が示されていないが、これが一番大事なところではないか。次回にでも紹介して欲しい。

また、平成19年度にCO₂が44%削減したという件についての詳細な説明資料も、次回に出して欲しい。

(石田(哲)委員)

景気が悪くなるとごみが出ないため、ごみの減少は施策の効果だけではないはずである。

京都市では資源ごみを売却されていると思うが、高く売却するためには、洗浄などに手間をかける必要があり、その費用対効果はどうなっているのか？この買取価格にも景気は連動しているはずである。

景気によって変わる要素を加味しなくていいのか？

(事務局)

景気変動とごみ量の関係についてみると、この1年、建設関係の着工件数の減少から事業系ごみは減少しており、景気変動も読み込んでいくべき要素であると考えられる。リサイクルルートについても、現在は古紙の引き取りが好況であるが、先々お金をかけて引き取ってもらう必要が生じる可能性も否定できない。したがって、施策だけで廃棄物量が変動しているわけではないというのは理解できる。但し、これらの数字的な分析には限界がある。

リサイクル等について、費用対効果のみを判断材料としている事業体もあるが、地球環境という面から見ると費用対効果だけで判断するのには抵抗がある。議論を踏まえていきたい。

(事務局)

今の説明について補足させていただく。

経済とごみ量は、以前は相関が高かったが、最近はやほど相関が高くない。これは、特に容器包装などで軽量化が図られているためで、景気が良くなれば必ずしもごみが増えるという状況ではない。

経済を伸ばしながら、ごみを減らしていくにはどういう仕組みが必要かというのも大きな課題であると思っている。

(石田(捨)委員)

ごみの発生の元となる人口、世帯数などは出してもらったが、京都市内の就業人口もつかめるといいのでは。事業系の廃棄物量と密接に関わると思うので。

(事務局)

就業人口は、次回に提示させていただく。

これ以外にも、ごみ量との関係がわかる資料を提示したい。

(酒井部会長)

先ほど意見の出た経済とごみ量との関係性を数字で示せる資料を出して欲しい。

また、説明のあった資源生産性についても資料を出して欲しい。素材別に資源価格がどうなっているのかは重要であるので、これも示しておいた方がいい。

観光客5,000万人という数字が他都市と比べてどうなのかのデータを用意していただきたい。

(石田(哲)委員)

観光客は、泊まってもらえればいいが、泊まらないとごみと排気ガスだけ残されることになる。そういうことになっていないか。

(中村委員)

観光客のカウントはどういう形でしているのか？宿泊者なのか、日帰りなのか。統計の取り方は各都市で同じなのか？

(事務局)

次回、提示させていただく。

(北原委員)

業界では、宿泊客は伸び何人と出しているが、全部の施設が業界に入っているわけではないし、日帰り観光客の数はわからない。

また、カウントの仕方は自治体によって違い、統一されていないと聞いている。

(酒井部会長)

データの取り方が異なるならば比較する意味がないようにも思われるが、調査して、可能な範囲で次回示して欲しい。

(佐伯委員)

資料9頁で、食べ残し・調理くずの排出削減(事業系)の進捗状況が、平成18年度の55%削減から平成19年度は4%削減となり、あまりにも差があるが、どうなのか？

加えて、家庭の手付かず食品の排出削減は、平成18年度の21%削減から、平成19年度は2%増加となっている。これはカウントの仕方によるものなのか？

（事務局）

事業系ごみの組成の変動が大きいことが影響している。組成の把握は難しく、組成と排出量から算出しているデータもあるので、組成に差があると削減率にも大きな差が現れる。

これは、家庭系についても同様である。

（石田（哲）委員）

指定ごみ袋の収入 20 億円のうち、製造・保管・配送等の製造コストに 11 億円かかることであるが、その 11 億円の中味は公表されていない。その資料を出して欲しい。

（事務局）

基本的には入札により、その中で安いところを選択している。その内訳資料は次回提示させていただきます。

（酒井部会長）

佐伯委員の指摘について、食品ごみ等をさらに細分して目標とするのは非常に難しいものである。ユニークなことをやるのはいいが、目標にすることが良かったのかどうかを含めて、議論していきたい。一回の分析で値がフラフラするようなものを指標としていいのかという疑問はある。こういった目標を設定する概念は大事だが、フォローアップの難しさがある。

単年度ごとのまとめが良いのかも含めて出してもらっているということで、理解していただきたい。

（中村委員）

市の北部と南部でライフスタイルが違う。どの地域の何年度のごみはどうだったというコメントを入れていただくと経年変化がわかる。様々な地域・年度のデータを混同して示されても、何も把握できない。

（酒井部会長）

今のご指摘については、先ほどお願いした容量比データの提示と合わせ、後日追加説明があった方がいいと思う。

（石田（哲）委員）

市民の一員として、ごみの量が削減しているのは実感できる。

現状は週に 4 回収があるが、それに協力しない地域での別途の収集、ルールを破る者に対する監視カメラの設置などにもコストがかかるであろう。このようなルール破りを把握している資料、収集の実態などがわかる資料があれば提示していただきたい。

(酒井部会長)

残りの参考資料について、説明してください。

(3) 参考資料について

事務局より資料に基づき説明

(石田(哲)委員)

観光地という特性もあり、夜間収集をして欲しいという意見もあるかと思うが、これができなかった経緯についての議論はなかったのか？

(事務局)

過去の審議会や部会において、夜間収集についての議論はあったが、結果として実現しなかった。

福岡市はすべて夜間収集を実施しているが、他の大都市では実施していない。

夜間収集が採用されない理由として、夜間収集にした場合、どれだけルールが守られるかという安全性の問題がまずある。また、京都市で夜間収集の必要性についてアンケートを行ったが需要はそれほど高くなかった。一番大きい理由としては、福岡市の夜間収集コストが通常の2倍程度かかっていることが挙げられる。さらに、夜間にパッカー車が入っていくことが許容されるかという問題もある。

(酒井部会長)

夜間収集については、各委員の方々の意見もあると思うが、観光との関係も含めてという部分があると思う。

(石田(哲)委員)

全市的には言わないが、それを望む地域では実施するなど、地域的な視点で考えたらどうか。

(酒井部会長)

夜間収集については、本部会の大筋の話となる部分ではないかと思うが、そういった視点も盛り込みつつ議論していくつもりである。

2 今後のスケジュール

事務局より資料に基づき説明

(石田(哲)委員)

見学会などは、要望したらスケジュールに別に入ることになるのか？

(酒井部会長)

焼却あるいは生ごみの現状を見る機会を設けていただくことを本部会委員の総意としてお願いする。スケジュールについては事務局の方で考えていただきたい。

(浅利委員)

ごみの細組成関係については、指標も大事だが中味も重要。中身がわかれば、市民の努力だけでなく売り手、流通も努力できる場所があると思うので、ごみ減らしの参考になるような資料を作成すればよいのではと思う。

最終的な落としどころとして地域特性に依存しながら、取り組み体制が見えるような形という話であったが、ステークホルダーの顔の見えるような資料があると議論しやすい。

有料化財源の使われ方について、ゴミゲン・ネットの取組状況等について報告して欲しい。また、3R型、2R型社会の具体的なコンセプトの説明があっても良いのではと思う。

各委員の立場が様々なので温度差、知識差があるから、ヒアリングシートなどを用意し、みんなの意見をもらうのがいいのではないか。

10～11月にごみ調査をやるのでご希望の方はご参加ください。

(事務局)

要望には応えさせていただく。

(岡委員)

促進、推進などという言葉が使われているが、具体的に何をやったのかははっきりしない。

(酒井部会長)

岡委員の質問に対しては、具体的にヒアリングシートで対応していただく。

(石田(捨)委員)

横浜や名古屋、北九州などを見ると、京都市はすごくレベルが低いと思う。例えば、分別のやり方一つとっても、やっと、プラスチック製容器包装が分別できた程度である。もっと先進的にやられている都市の情報・アイデアを出してもらうことが必要だと思う。

京都市は収集運搬を3人でやっているが、2人でやっている都市もたくさんあるし、民間の事業系廃棄物の収集業者は1人でもやっている。かなりごみ処理費用もかかっているのではないかと思うが、もっと効率を考えて実施すべきではないか。こういったところから、大胆に1ランクレベルアップした計画なりの導入が必要ではないかと思う。これについて、他府県の動向も取り入れて紹介してもらってもよいのではと思う。

(林委員)

近畿地域の環境ビジョン作りを行っているが、近畿地方の特色として、1人当たりの排出量が多い、リサイクル率が低い、最終処分率が高いといったものが挙げられる。京都府レベルでも他地域と比べ悪い面があるので、他都市との比較は重要と思う。我々に提供できるデータがあれば協力させていただく。

有料化の効果の検証について、環境省でマニュアルを出しているが、今までの話で出なかった指標として、住民意識、不法投棄・不適正処理がどうなっているかという項目が挙げられている。調査は大変かもしれないが、把握できれば効果の検証に有効であろう。

観光客のごみ問題は、観光都市としての宿命だと思う。国立公園では、ごみの持ち帰り運動があり、この考え方が適用できるかどうかはわからないが、参考にはなると思う。

(中村委員)

先日、1,300人を対象に有料袋の住民意識についてアンケート調査を行い、812人から回答があった。結果について、私どもの方から後日報告させていただきたい。

(石田(哲)委員)

事業者の立場からの意見であるが、ごみの持ち込みをする際に、職員が何故こんなに多いのかと感ずることがある。コストの問題を議論する際には、人件費についても切り込む必要があると感じている。

見学用の施設を見学するのではなく、生の現場で、無駄になっている部分も含めて見学しないと実態はつかめないと思う。

(酒井部会長)

各委員の様々な立場から、一部批判的な意見も出ているが、これが本部会の意義であると思うので、事務局としても、これを真摯に受け止めていただきたい。できない部分については、その旨を言っていただき、意見を交換していけばよいと思う。

他都市の状況を意識しつつ、どのような計画にするかを定める必要があるだろう。先の林委員の報告を踏まえると、少なくとも近畿圏のトップランナーにならねばならない。

他都市に比べて遅れているという厳しい意見も出ているが、有料化をいち早く実施しているなどもあり、褒める部分は褒めるということも忘れずに議論して欲しい。

(事務局)

今回出た意見に対しては、できるだけ努力して次回に提示したい。

行政としては、他都市より決して遅れているとは思っておらず、先進的であると自負しているが、客観的な意見を取り入れながら、修正を加えていきたい。

ごみ処理に関しては、料金を下げることが必ずしもサービスであるとは思っていない。市民のためにどういう形が良いかの議論をしていただきたい。

次回の専門部会は9月末から10月上旬に開催する予定。

IV 閉会